

## 外国郵便の宛先

杉原 正樹

もう10年も前だろうか、「スタンプショウ博多」参観の折、地本本部長だったT君より何か話せと言われ、国内便や外国郵便の宛先を話題にした記憶がある。

貼ってある切手や料金体系は平凡であっても、宛先によっては「おおっ」となるカバーもある。欧米のオークションでは宛先で値段が相当違うこともあり、日本でもオークションで珍しい宛先には付加価値が付いたり、太字の注目表記になったりしている。そのような中で、野口さんお一人様程度で入手した戦後の外国郵便カバー類を紹介したい。

銀座疾風社のメールオークションに1次円単位50円2枚貼バチカン宛航空便の出品があった。バチカンといえば郵趣雑誌の小国特集として取上げられる常連国である。人口800人程だが、世界13億人のカトリック信者を統べている。バチカン宛のカバーを筆者は初めて見た。日本でもそうであるが、信徒・信者や信仰情報が集まる社寺宛郵便物が外部流出するのは例外的とされる。バチカンには聖職者以外の“国民”は存在せず、通信文や郵便物が流出することはなく、私信であっても似たようなものであろう。

オークションの下見をした時、受取人の名前を見てびっくりした。英語でPope Pauro VI（正しくはPaul VI）と書いてある。パウロ6世。当時のローマ教皇（在位1963～1978）である。しかも赤字でPrivet（プライベート）の記載がある。差出人を確認したが、特段著名な人ではなさそうである。パウロ6世が手紙を読んだのだろうか？もしかしたら指紋が残っているのでは？何故、この手紙が流出したのだろうか？とカバーに直接関係ない疑問がいろいろ湧いてきたのだが、とにかく最低値近くで落札できた。流出したのは手紙が宗務部門で開封され、ローマ教皇が読むに値する要件ではなく、差出人に返送されたため、と想像している。

郵趣的には第三地帯10g迄100円の料分で宛先がバチカンであることを除けば、珍しくもなともない。欧文印の掛かりが悪いなど状態も今一つである。にも拘らずバチカン宛に惹かれたのは、英・独・仏宛よりはるかに気の利いた“光る”宛先と考えたからである。

50円の使用例リーフをつくるとすれば、もう1点エンタが欲しくなる。横型外信カバーの相方には、横型の外信葉書を並べるのはどうだろう。米国人観光客がトルコ・イスタンブールに宛てた、第三地帯宛航空葉書適正貼使用例である。英・独・仏宛葉書はほどほどあるが、ヨーロッパとは言え東端の都市（ボスポラス海峡を渡るとアジア）宛はどこにでもあるレベルではない。平凡な使用例ではあるが、先のバチカンと同じ“宛先でのみ光る”例である。トルコは露土戦争（1877～78）に敗れ、エルトゥールル号遭難時の救出や日露戦争で日本が勝利したこともあって親日的な国であるが、人的・経済的交流が小さく戦前、戦後ともトルコ宛郵便物は少ない。

同じ50円貼葉書なら入手し易い英・仏・独宛などより、「珍しい宛先」を選んだほうが自慢もできよう。日本では宛先によるカバーの価格差はまだまだ小さく、入手に時間が掛かる点を除けばチャレンジする価値は十分にあると思う。

日本では宛先への関心が薄く、戦後のカバーは勿論、戦前であっても宛先国だけで価値が付きにくい。一方で、どこの国宛が少ないのか、どの程度の少なさなのかといった希少性に対する定量的指標がなく、収集経験則で判断するしかない点に関心の深まらない一要因と考えている。郵趣上の定量的指標はないが、一つの参考指標を挙げることはできる。それは国際電話料金である（固定電話発信ベース）。NTTやKDDIでは国別の料金表

をつくっているが、料金は距離ではなく、通信量の多寡によって違えている。米国より韓国に電話するほうが高い（米国；60円/分，韓国；110円/分，NTTの場合）のである。電話料金と郵便物差出し数に類似関係があると考えれば，国際電話料金表が指標として機能できよう。

米国を基準（最大郵便宛先国）にして，主要西欧諸国を除く各国への料金倍率を少なさの基準とする。先の米国，韓国では韓国宛が2倍程度少ない（値段が高い，との意味ではない）との指標になる。欧州方面では主要欧州諸国の平均料金から同様の数値を導き出せばよいだろう。日本へのカバー還流量の程度によって実際の多寡は異なるものの，電話料金の高い国宛のカバーはネットオークションのe-Bayであっても簡単に入手できないだろう。

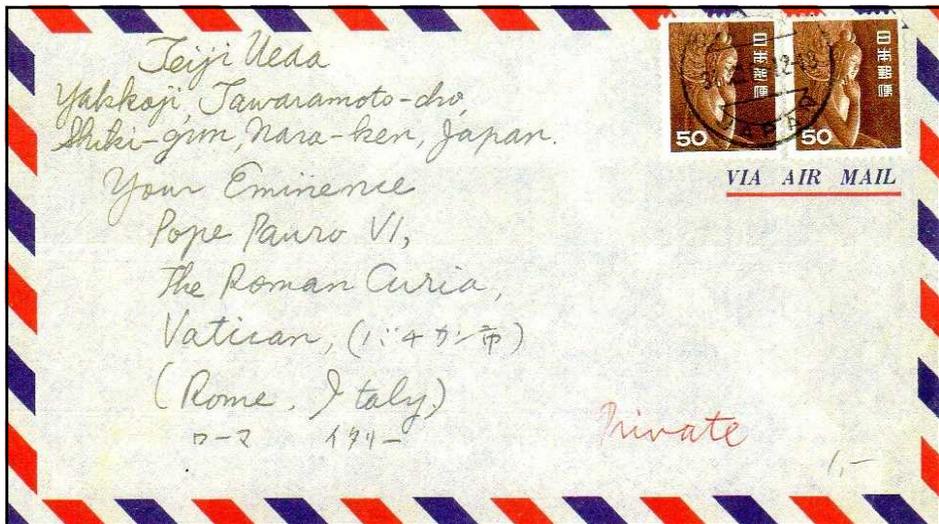


図1: バチカン宛航空書状 TAWARAMOTO(NARA)1966.12.31

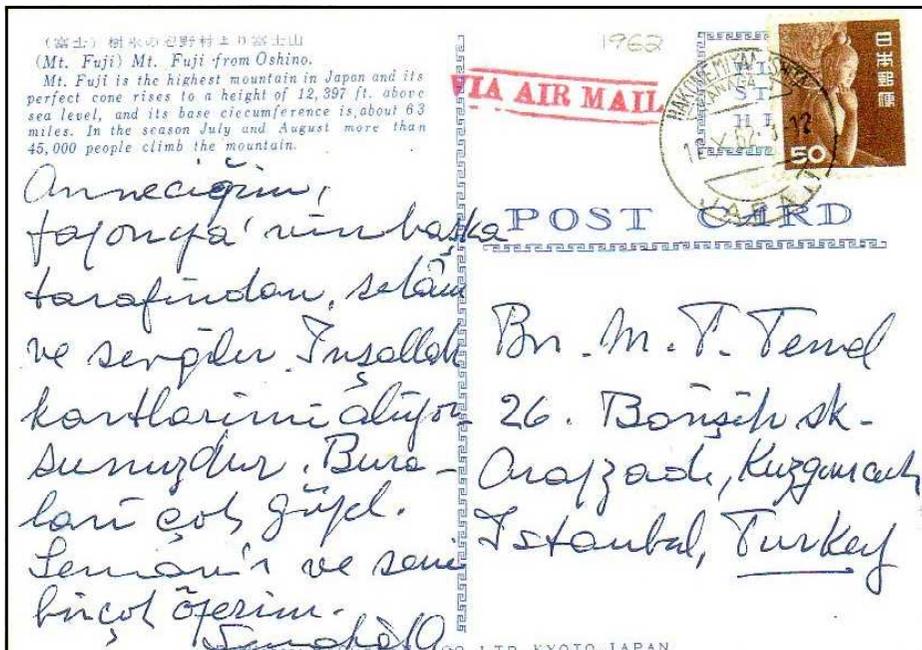


図2: トルコ宛航空葉書 HAKONEMIYANOSHITA(KANAGAWA)1962.10.12